16　「物語」　─中古の歌物語

17年度　立教大学

★　左の文章を読んで後の設問に答えよ。

　しましにけり。例のごと、御遊びあり。「このわたりの、あまたまゐりてさぶらふなかに、声おもしろく、⑴よしあるものは侍りや」と問はせたまふに、うかれめばらの申すやう、「がむすめと申す者、めづらしうまゐりて侍り」と申しければ、見せたまふに、さまかたちもげなりければ、あはれがりたまひて、うへに召しあげたまふ。「⑵そもそもまことか」など問はせたまふに、鳥飼といふ題を、みなみな人々によませたまひにけり。おほせたまふやう、「玉淵はいと⑶らうありて、歌などよくよみき。この鳥飼といふ題をよく⑷つかうまつりたらむにしたがひて、まことの子とはおもほさむ」とおほせたまひけり。うけたまはりて、すなはち、

　　⑸浅緑かひある春にあひぬればかすみならねどたちのぼりけり

とよむ時に、帝、⑹ののしりあはれがりたまひて、御しほたれたまふ。人々もよくひたるほどにて、酔ひ泣きいと⑺になくす。帝、御ひとかさね、たまふ。「ありとある上達部、みこたち、四位五位、⒜これに物ぬぎてとらせざらむ者は、座より立ちね」とのたまひければ、かたはしより、⑻みなかづけたれば、かづきあまりて、ふたばかり積みてぞおきたりける。かくて、かへりたまふの七郎といふ人ありけり、⒝それなむ、このうかれめのすむあたりに、家つくりてすむとイ聞しめして、⒞それになむ、のたまひあづけたる。「⒟かれが申さむこと、院にせよ。院よりたまはせむ物も、かの七郎君につかはさむ。すべて⒠かれにわびしきめな見せ　　　」とおほせたまひければ、つねになむロとぶらひかへりみける。

（注）　１　亭子の帝―宇多天皇のこと。

　　　　２　鳥飼院―摂津国（現在の大阪府）にあった離宮。

　　　　３　うかれめども―技芸をして各地を巡る女性たちのこと。

　　　　４　大江の玉淵―大江音人（平安時代の歌人）の子。少納言までのぼった。

　　　　５　南院―光孝天皇の第一皇子（是忠親王）のこと。

問１　―線部⑴の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

１　容姿が美しいもの　　２　機転がきくもの

３　話の上手なもの　　　４　楽器が弾けるもの

５　品格のあるもの

問２　―線部⑵の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

１　いったい本当に玉淵の娘なのか

２　いったい本当に歌が詠めるのか

３　いったい本当に声が美しいのか

４　いったい本当に管弦が上手なのか

５　いったい本当に「うかれめ」なのか

問３　―線部⑶の現代語訳として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

１　熟練していて　　２　忠実であって　　３　苦労していて

４　分別があって　　５　自立していて

問４　―線部⑷の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

１　口にする　　２　心に留める　　　３　曲に作る

４　歌に詠む　　５　人々に広める

◎問５　―線部⑸の歌について。この歌の長所をのべたものとして最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

１　「鳥飼」という題を、句の頭にうまく散りばめた。

２　「鳥飼」という地名を、巧みに詠みこんだ。

３　鳥飼院の風景を、比喩的に美しく表現した。

４　鳥飼院での孤独感を、倒置法で味わい深く表した。

５　鳥飼院での遊びの楽しさを、写実的に詠みあげた。

問６　―線部⑹の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

１　口をきわめて感動なされて

２　大声をあげてご立腹になられて

３　どよめく臣下たちをなだめられて

４　気もそぞろに暗唱なされて

５　心の底から同情なされて

問７　―線部⑺の現代語訳を七字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

［　　　　　　　　　　　　　］

問８　―線部⑻の解釈として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

１　帝は上下の衣を揃えて、臣下にお持たせになったので

２　臣下は部屋の隅から隅まで、整理整頓につとめたので

３　位の高い者も低い者もみな、玉淵の娘に衣服を与えたので

４　上座の者から下座の者まで、ひれ伏したので

５　臣下は帝に、我も我もと新しい衣服をさしあげたので

問９　空欄　　　にはどのような語を補ったらよいか。適当な仮名一字で記せ。

［　　　］

問10　　　線部（イ）・（ロ）の動作の主体として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選び、それぞれ番号で答えよ。ただし、同じ番号を二度用いてもよい。

１　亭子の帝　　２　玉淵　　　　　　３　玉淵の娘

４　上達部　　　５　南院の七郎君

（イ）＝［　　　］　　（ロ）＝［　　　］

問11　＝線部⒜～⒠について。その説明として最も適当なもの一つを、左記各項の中から選べ。

１　⒜・⒝・⒞は同一人物である。

２　⒜・⒟・⒠は同一人物である。

３　⒝・⒞・⒟は同一人物である。

４　⒝・⒞・⒠は同一人物である。

５　⒝・⒟・⒠は同一人物である。

【解答】

問１　５

問２　１

問３　１

問４　４

問５　２

問６　１

問７　この上なく（５字）

問８　３

問９　そ

問10　（イ）＝１　（ロ）＝５

問11　２

【現代語訳】

　亭子の帝が、鳥飼院にお出かけになった。いつものように、管弦のお遊びがある。「このあたりのうかれめたちが、数多く参上してひかえている中に、声が趣深く、品格のあるものは控えているか」と（帝が）お尋ねになると、うかれめたちが申し上げるには、「大江の玉淵の娘と申し上げる者が、めったにないことに参上しております」と申し上げたので、（帝が）ご覧になると、（そのうかれめは）姿も容貌もさっぱりと美しかったので、（帝は）しみじみと心動かされなさって、（御殿の）上にお招きになる。（帝が）「いったい本当に玉淵の娘なのか」などお尋ねになって、鳥飼という題（で歌）を、（そこにいた）すべての人々に詠ませなさった。（帝が）おっしゃるには、「玉淵は（歌の道に）たいそう熟練していて、歌などを上手に詠んだ。この鳥飼という題をうまく歌に詠んでみせたようならば（それに）したがって、本当の（玉淵の）子とは思おう」とおっしゃった。（うかれめは）承って、即座に、   
　　　浅緑色に（草木が芽ばえ）、価値のある鳥飼の春に巡りあったので、（私

　　はその春の）霞ではないが、（帝の御殿に）のぼったことだ。

　と詠む時に、帝は、口をきわめて感動なされて、涙をお流しになる。人々もすっかり酔っぱらったころあいで、酔い泣きをたいそうこの上なくする。帝は、御袿をひとかさねと、袴もお与えになる。「ここに居るすべての上達部、御子たち、四位五位の者たち、このうかれめに衣を脱いで（褒美を）与えない者は、この席を立ち去ってしまえ」とおっしゃったので、（そこにいたものは）片端から位の高いものも低いものもみな、うかれめに衣服を与えたので、（うかれめは、いただいた衣服を）肩にかけきれなくなって、（集まった衣服を）二部屋ほどに積んで置いていた。こうして、（帝が都に）お帰りになるということで、南院の七郎君という人がいた（のだが）、その者が、このうかれめの住むあたりに、家を作って住んでいるとお聞きになって、その者（＝南院の七郎君）にお命じになって、（うかれめの世話をするように）お預けになり世話をおさせになった。「この（うかれめの）申すようなことは、院に奏上せよ。院より（うかれめに）与えるような物も、この七郎君（のところ）に届けよう。決してあのうかれめにつらい目を見させるな」とおっしゃったので、（七郎君はうかれめを）常に訪ねて世話をした。